

仕事と育児

藤森 紀子

慶應義塾看護短期大学専任講師

母親の就労は子どもに悪影響？

先日、新聞に「米国における働く母親の育児事情」という記事が掲載されていました。内容は「米国では働く母親が多く、家族崩壊、麻薬、十代の妊娠などが問題となっており、両親が不在の場合、問題児が多く、親が子育てをしっかりしているほど子どももしっかり育つ」といったものでした。私は働く母親として不安になる一方で、就労が子どもに悪影響を与えるのだろうかとか疑問をもちました。

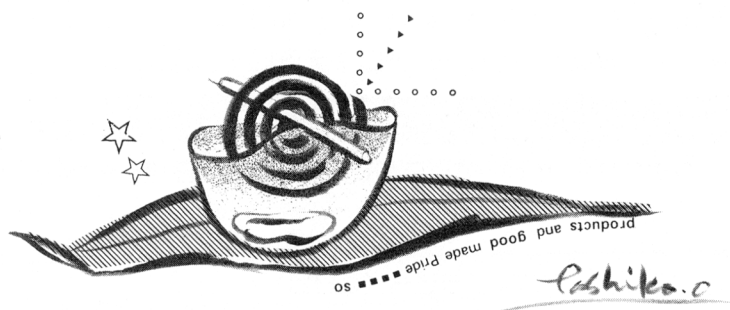
確かに就労によって母親が身体的・心理的ストレスを自覚すれば、子どもに影響を与える可能性は否定できないと思います。それに、日本の場合、男性の意識は徐々に変化してきてはいるものの、まだまだ「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割意識が根強く残っています。育児、家事といった負担が仕事をもっている母親にかかることは避けられないのが実情なのです。その結果、そのはけ口は自ずと子どもに向けられるのではないのでしょうか。

また、その記事の筆者は、今の米国での最新のトレンドは、高学歴の女性たちが仕事をもたずに、胸を張って「私は私の子どもの母親である」と言えるように子育てに専念すること、とも述べています。米国の影響を受けやすい日本ですから、あと何年もしないうちに子育てと仕事の両立に疑問をもつ考え方が、日本にも浸透してくるのかもしれない。

育児は主体性を求められる作業、だからやりがいがある！

日本人は個性を尊重しながらも和を大事にし、集団からはずれないようにと意識します。この傾向は育児にもみられます。たとえば、母親になって間もない新米ママさんは、必ずと言っていいほど先輩ママさんと自分を比較します。比較すること自体は、母親としての自己概念を形成する上で必要なことですから否定はしませんが、日本の母親たちはその後、決まって“自分は他の人よりも劣っている、駄目な母親なんだ”と結論づけるのです。このことは自尊心を低下させ、母親としての自己概念の形成を阻害しますし、関心はいつも自分にありますから、せっかく子どもが何らかのサインを送っていても見逃してしまい、母子関係の確立を阻害することにもなりかねません。“できない自分も自分なんだけどなあ。それを認めて自分らしい育児をすれば、どんなにか楽なのになあ…”と思うことがよくあります。

さて、そんな私ですから、人から見れば、勝手にきままに楽しく育児をしているように見られがちです。しかし育児は自分で判断し、決断して実践していかなければならない主体性を求められる作業ですから、大変な部分も多々あります。実際に自分で育児を体験してみると、助産婦であっても日々「??」だらけで、なかなか答えが見つからず思い悩むこともしばしばです。しかし、試行錯誤を繰り返しながら自分のやり方を見いだしたときに感じる達成感と充実感には、何とも言えない気持ちよ



さがあります。その積み重ねが「自信」を産み出し、自分らしさを発揮することにつながるのです。

育児にストレスを感じている多くの人は、自分の意にそわない育児をしているか、他者の助言に忠実であるがために、自分はどうしたいのかを見失っているのではないかと思います。母親が自分のやり方にもっと自信をもち、仕事や育児に生き生きと取り組んでいけば、そんな母親の姿を見ている子どもたちはきっと誇りに思うはずです。多少感情的に叱られてもへっちゃらです。

私の関わりは間違っていなかった！

私は小学校1年生の頃から看護婦になることを決めていました。「人のために働きたい」「たとえ結婚できなくても、資格があれば女一人でも食べていかれるから」というのが志望動機だったような気がします。今思えば、小さい頃から経済観念はしっかりしていたものだ和我ながら感心してしまいます。運よく(?)結婚し、子どもにも恵まれ、現在子育てもしながら仕事をしています。もちろん、私一人の力では成しえなかったことです。夫や双方の両親、職場の同僚、友人、保育所の先生方など、周囲の方々に支えられてのことでいつも感謝しています。

そして、何よりも勇気づけられるのは、かわいい子どもたちの激励です。疲れて帰宅すると「お仕事ご苦労様」と言いながらマッサージをしてくれたり、朝早く仕事に出かけるときには、眠い目をこすりながら「いってらっしゃい、お仕事がんばってね」と言ってくれたり、子どもなりに精一

杯の思いやりを示してくれます。感激の余り涙がこぼれそうになると同時に、私は子どもたちに育てられているんだということに気づかされます。

「育児は育自」という言葉がありますが、まさにその通りだと実感しています。また、息子は生活の授業で「家の仕事はみんなで協力してやるんだよ」という意見を発表したそうです。毎日うるさく言ってもなかなか行動しない子どもたちですが、“ちゃんとわかってくれていたんだ”と思い、子どもを信じて待つことが育児する上でとても大切な姿勢なのだと実感しつつ、自分の関わりは間違っていなかったと確認するのでした。

本来、親は全面的に子どものことを受けとめなければならぬ存在なのに、忙しくて余裕がなくなると、子どもがやっていることにちょっと目を向け、言葉を返す、こんな簡単なことがなかなかできません。しかし、子どもにとって、親に受容されることやタイミングよく応答されるという体験は、自己を確立する上でも、他者との関係を確立する上でも、重要なことです。そのことを肝に命じて今後も歩んでいきたいと思います。そして子どもあつての母親ですが、女性としての人生も大切にしてほしいということを最後に多くの女性に、メッセージとして伝えたいと思います。

今回は廣田英子さんにバトンタッチします。廣田さんとは同じ看護を志し、看護学校こそ違えども、幼稚園から助産婦学校まで同級生という腐れ縁の間柄です。縁あって、2~3年目から教育という同じ分野で働くことになりました。廣田さん、よろしくね。(ふじもり・のりこ)